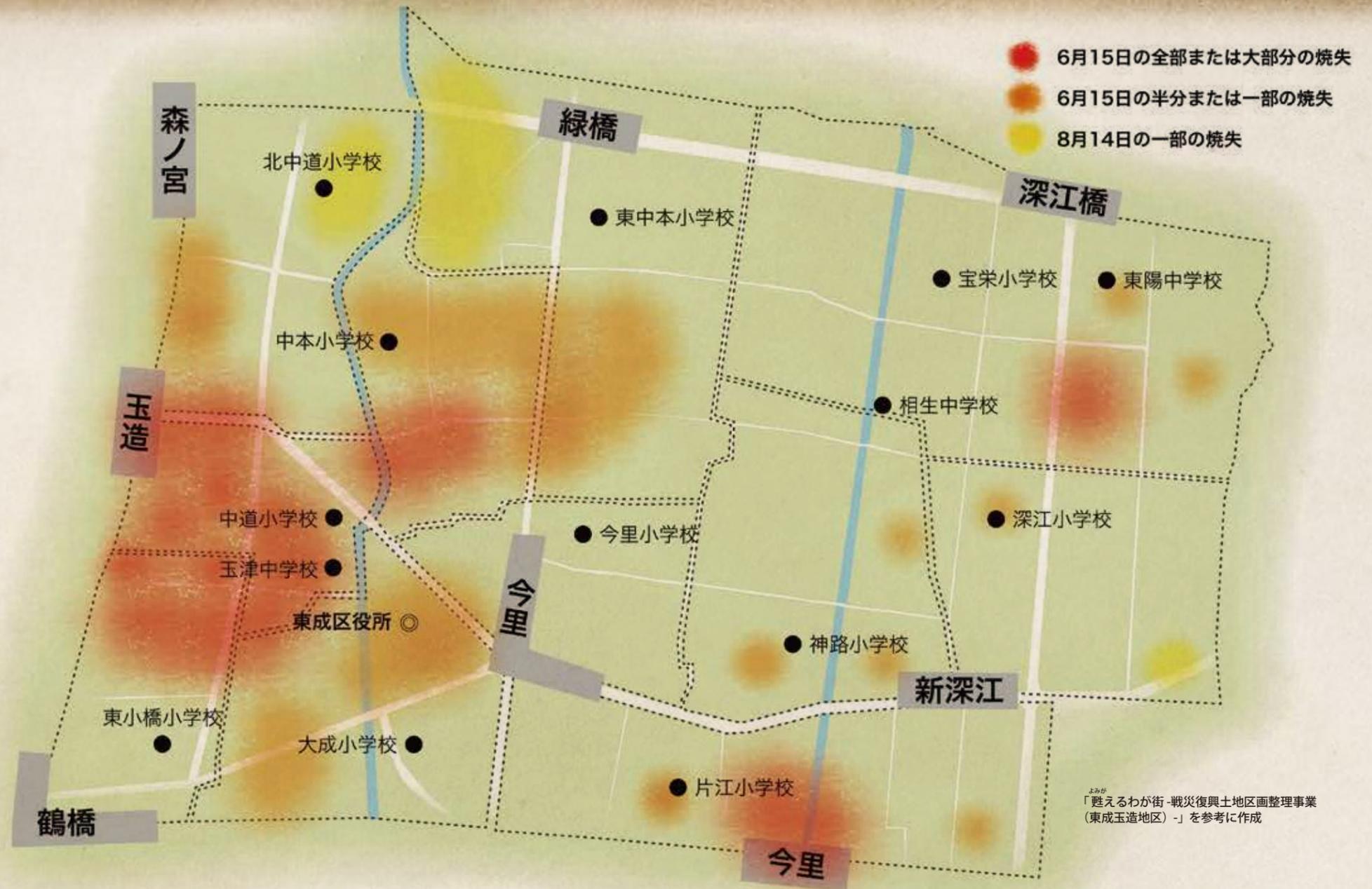


戦時下の東成区

私たちのまち東成区も、戦争で大きな被害を受けました。空襲でまちがどのように破壊され、子どもたちがどのような生活を強いられたか見ていきましょう。



昭和の初めの東成区

東成区が現在の形となったのは昭和18年。昭和の初めのころの東成区は、現在の生野・旭・城東・鶴見の4区にまたがる広大な区域を有していました。当時、大阪城の東側には、アジア最大規模の兵器製造工場である大阪砲兵工廠が設置されており、東成区では鉄鋼・機械・化学などの関連工場が増え、そこで働く人々も多く住み、市場が多数開設されるなど商業も発展。東成区西北部は住宅地や家内工業地、鶴橋方面は商工業が目立ち始め、区内は活況を呈していました。

空襲で区の半分が焼け野原に

東成区で特に大きな被害が出たのは昭和20年6月15日の空襲です。全焼家屋数は6,363戸、罹災者数は20,699人にも上りました。西の空からやってきたB29は焼夷弾を次々と落とし、まちはたちまち炎に包まれました。

特に西部に被害が集中していました。焼け出された人々が風呂敷を背に、リヤカーに身のまわりの品を積み込んで、東へ東へと逃れる長い行列が続きました。何もかもすっかり灰になってしまった焼け跡に立つと、高台に上っているわけでもな

いに遠く大阪城を見渡せたそうです。また、8月14日の空襲では、すぐ近くの大阪砲兵工廠が壊滅的な被害を受け、東成区内でも北部を中心に多くの住民が巻き込まれました。

昭和19年2月には約13万5千人であった区の人口は、戦後すぐの昭和20年11月には約7万人弱と半分にまで減ってしまいました。

不安に包まれた疎開生活

東成区の集団疎開先は奈良県の各地でした。昭和20年7月には、10校の児童2,575人が不安に包まれながら、家族の残る大阪の空を見つめていました。縁故疎開も含めると、さらに多くの児童が親元をはなれて、心細い日々を過ごしました。

